



Title	翻訳理論の動向と翻訳者の課題
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 1968, 20, p. 315-328
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80339
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

翻訳理論の動向と翻訳者の課題

八 木 浩

Neue Tendenzen der Übersetzungstheorie in Europa und die Aufgabe des Übersetzers in Japan

Hiroshi Yagi

Die Tatsache, daß sich sehr viele Übersetzer, Schriftsteller und Verleger aus 20 Staaten im April 1965 in Hamburg (und in noch größerer Zahl 1966 in Moskau) versammelt haben, um sich an dem Internationalen Kongreß literarischer Übersetzer zu beteiligen und daß dessen so fruchtbare Ergebnisse veröffentlicht wurden, ist für uns ganz erregend und aufschlußreich. Deswegen fasse ich hier diese Ergebnisse kurz zusammen, insbesondere über die „Internationale des Geistes des Übersetzers“ (Zlatko Gorjan), über den „verkannten Beruf“ des Übersetzers (Rolf Italiaander) und die technischen und methodischen Schwierigkeiten des Übersetzens. Auch die konkrete „Resolution“ und „typischen Untugenden der Übersetzer“ interessieren uns außerordentlich. Diese Abhandlungen und Berichte geben mir Anlaß, über die Aufgabe des Übersetzers nachzudenken. Daß wir hundert Jahre seit dem intimen Kontakt mit Europa und Amerika nicht immer gute Werke, die „durch Macht geschützt“ waren, übersetzt haben und selbst die besten Germanisten faschistisch bekannte Bücher übersetzt haben, beweist wie wichtig es ist, über den Zusammenhang des Übersetzens und der Politik wie Gesellschaft sich Gedanken zu machen. Indem wir versäumt haben, dieses japanische Unglück des „tradire-tradurre“ zu reflektieren, sind ausländische Bücher, durch „Kulturindustrie“ gefördert, sintflutartig übersetzt worden. Zugleich ist die Übersetzung für Handel, Verkehr und Industrie, die pervers ist und das Unglück der Menschheit herbeiführen könnte, auch sehr rege. Der krankhaft kommerzielle Charakter sowohl der literarischen als auch der industriellen Übersetzung muß heute in seiner Wurzel, die eigentlich ohne Entfremdung für Leben und Kultur lebt, wieder philosophisch und technisch ins gesunde Licht gesetzt werden. In diesem Sinne behaupte ich, daß es wichtig und aktuell ist, die Stufen der verschiedenen Übersetzungen und die Aufgabe des Übersetzers theoretisch neu zu rekonstruieren.

最近ドイツで翻訳理論にかんする注目すべき二冊の書物が出版された。

Übersetzen—Vorträge und Beiträge vom Internationalen Kongreß literarischer Übersetzer

in Hamburg 1965 Herausgegeben von Rolf Italiaander, 1965 Athenäum Verlag Frankfurt a. M., Bonn

Das Problem des Übersetzens Herausgegeben von Hans Joachim Störig, 1963, Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt

後者はヒエロニムス、ルター、ノヴァーリス、ゲーテ、シュライエルマッハー、W・フンボルト、A・W・シュレーゲル、ショーペンハウアー、J・グリム、ニーチエ、ヴィラモヴイツ・メレンドルフ、ボルヒェルト、ベンヤミン、フォスラー、ローゼンツヴァイク、シャーデヴァルト、ブーバー、ハイデガーなど、ドイツ文化史上の人々がこれまで翻訳についてのべたエッセイや論文をぎっしり収めている。前者は1965年4月、ハンブルクで開催された「国際文学翻訳学会」(Internationaler Kongreß literarischer Übersetzer)を記念するユネスコ援助による出版物で、この学会で提起されたあらゆるテーマをえらび、殆んどすべての発表論文を収録している。まず、この書物を紹介することに重点をおいて論じてみよう。

この学会には20カ国の翻訳者、批評家、出版業者が集まった。この三種のパートナーが一つの会議で研究しあったのは学会最初の試みとして大いに注目されている。またこの学会のために Freie Akademie der Künste in Hamburg がいろいろの世話にあたり、組織上の責任には der Verband deutscher Übersetzer literarischer und wissenschaftlicher Werke (VDÜ …… ドイツ文学・科学翻訳者協会), die Vereinigung der deutschen Schriftstellerverbände (ドイツ著述家協会), die Fédération Internationale des Traducteurs (FIT), さらにペンクラブ、ユネスコなどがあたった。

Rolf Italiaander の開会の辞①はFITがバリのユネスコの建物内で出発した時(1953)からこの学会に至るまでの経過を回顧している。FITは通訳養成の仕事に重点をおいてきたが、翻訳論の樹立をめざして、1963年の10年祭にあたり、ユーゴスラヴィアで文学作品の翻訳問題に注目すべきことが確認され、とくにその誤解されやすい職業を正しい観点のもとに再検討するはこびとなった。130年前にゲーテはカーライルにいつている：「翻訳の不十分さがどんなにとがめられようが、この世界の中では最も重要で尊敬されるべき仕事の一つである。」こうして翻訳者の地位の問題、翻訳と政治のかかわり、翻訳の方法論の三つが、アフリカ史の研究家 Italiaander の話からうきぼりにされ、その三つの問題が多くの発表論文の中心テーマとなったようだ。開会当日、DDR(東独)とソビエトの学者がパスの関係などで出席できなかった件に対して Italiaander はこういつている：「ソ連人がわれわれと同じドグマやイデオロギーを持っていないからといって、彼ら抜きで世界文学ができれば……。翻訳者こそ東西不問にして、どんな宗派にも民族にも差別と偏見を設けず、世界の人々をお互いに近づけるものである。翻訳家は倫理的使命を果たそう。迫害につながるものには手をふれず、W・H・オーデンの言葉『少しでも愛に欠ければ、われわれは没落する』を肝にめいじよう。イタリア語の tradire と tradurre (裏切りと翻訳)の語呂合わせをわれわれの名誉のために警戒しよう。」これにこたえてユーゴの作家 Zlatko Gorjan ②は Italiaanderの人間性を讃えて、諸国民、諸宗教、諸民族を超えたユネ

スコ精神をかかげる開会の辞をのべた。しかし論文の中で、翻訳と政治という点からは、やはり Italiaander の「未開諸国と翻訳者」③が注目をひく。植民地はなくなり、諸国民が自由な道を歩み、後進国が援助されるべき今日、精神と文化も翻訳によって交流し、それに協力せねばならない。1000のアフリカの言葉と方言の半数は文語すらなく、文法も辞書も整わない現状である。政治の援助は乏しく、翻訳家は探険に出ても疲れて帰ってくるにすぎない。タイ、ビルマ、インドネシアなどの翻訳者も十分ではない。これらの国々の文化を訳すことは平和への道である。ヨーロッパの諸機関の間で協力関係をつけ、政府の大きな援助をうけ、システムティックに進めていこう。世界文学こそ世界平和だ(F・リュッケルト)。彼らに英語でしやべれ、書け、というのは植民地主義だ。アフリカ語がしやべれるようにならねばならない。アフリカの文化と歴史と言葉を知ろう。大国主義は退き、アフリカの役割りは大きくなろう。このように彼は学者や翻訳者の国際的義務の大きさを説き、「翻訳者は言葉の最も深い意味において教育者として自覚せねばならない。そうしてこそわれわれは人類と世界平和に大きな貢献をなしうるであろう。」としめくくっている。そのほか August Klingenberg④はアフリカ語の、また、Annemarie Schimmel⑤はイスラム文学の翻訳の困難さをとりあげて論じている。とくに後者は多様多層なベルシャの表現を訳せるようになるためにはTopoi(表現の場)の研究が緊急の課題だと述べている。

次に注目されるのは発表論文の中に、翻訳者の社会的地位を論ずるものが多いことである。Gorjan ②はいっている：「何年か前はまだ翻訳者は無名のまま困難な職業に没頭していた。彼らはつつましく、たゆまず、力強く、確信にみちた仕事をしてきた。だが今や次第にこの無名の性格は退きつつある。翻訳文化は一年一年世界的なものとなってきた。」こうして翻訳者の根にある精神のインターナショナルがこの会議を生んだのだ。今や翻訳者と著述家と書店のインテンシブな協力が必要だ。この三者の道徳上の、また物質上の問題は密におりなされて、引き離されない。国民の精神的進歩のため、新しい視野をひらき、あらゆる地上の国民の相互理解をはかるのが、この三者の一体となった究極目標である。作家 Gerhart Pohl ⑥は一層強く訴えている――すぐれた作家がわずかに1000マルクとシガーをもらったが、その作品が何百万もの人によって読まれる。こういう話は永久におしまいにならねばならぬ。警察の介入なしに訳者や作者にこんなことがある以上、この社会には、40年前にホーフマンスタールがいった通りに、調子の狂ったところがあるのだ。自由職業の作家や翻訳家は社会の片すみに押しやられ、足なえ的存在となり、その生存可能性の見込みすら怪しいではないか。H・マンは「著述家は商わずとも商い人のための良心を持つ」といったが、この壮重な言葉は商う人に対し、著述家の良心を義務づけるものでなくてなんだろうか。出版者は自己を主張せずに、また政治の圧力をうけずに翻訳者の生存を可能にしうるか、ということが問題なのだ。批評家や書店の立場は精神の側になくはならない。しかし、口でそういうのはやさしいが、政府案の、作家と翻訳者の老後保証を確保する1%の支出の件をすら出版社は葬ったではないか。作家と出版社はきづつけあっている。今こそ両者は共通の仕事にたづさわり、老後・病災に対して保護を与えよ。俳優にもそうしてやらねばなるまい。2カ国語を支配する翻訳業は著述業に劣らぬ仕事であり、普通の仕事ではない。平和と人間性の

ため、偏見の除去のため、人間の自由のために寄与する翻訳者を新しく社会構成員の中に位置づけねばならない。ハンガリーの作家 György Rado ⑦ は翻訳者を歴史で大役を果たした Homo interpretes だという。また Marcel Reich-Ranicki ⑧ はヘミングウェイのドイツ文学への影響を例に、その影響者はヘミングウェイかそれとも訳者アネマリー・ホルシッツ＝ホルストかと問うている。Reich-Ranicki はさらにいう。3000冊以上が毎年翻訳されているドイツ、一日10冊が訳される国ドイツでの翻訳者の地位は驚くほど低い。それは大工よりも低いのだ。安い。だから早く、たくさん訳さねばおいつかない。この悪循環はどうしたら断ちぎれるか。そのような問題をめぐってやはり考えているチェコの、Bedrich Bösser⑨、ドイツの、Kurt Heinrich Hansen⑩、ドイツの有名な書店主 Hans Piper ⑪ の説が注目される。Bösser は批評家により翻訳がどんなに軽くあしらわれているかを指摘、批評家が原作と比べず、また分析もせずに批評している点を正そうとしている。批判する人はその領域での専門家でなくてはならない。翻訳のこのような軽視はジャーナリズムの粗雑さに責任がある。翻訳作品研究家がいる、翻訳史を研究してはならぬ、ということも多くの人によって主張されている。Hansen は辞書について、いろいろな提案をした。また彼は翻訳の学校や大学や研究所を建てよという。これまでの翻訳を精査し、翻訳テキストをつくり、他の学部なみにカリキュラムをつくるべきだ、というような外国語大学論が Hansen の所説なのだ。Piper は、未完の、自己批判不十分な原稿が持ちこまれることが多い例をあげ、書店としてはできるだけ長期間の契約をし、充分の期間を与える、とのべ、また、危険をおかしてもアジア・アフリカのものを多く出版したいといった。このようにして、不十分な答えではあるがこの方向でさらに追究していくならば、ヨーロッパにおける翻訳者の地位は次第に高まり、またそれにつれて翻訳が一つの学問として、はっきりした姿をとってくることであろう。ただ、私達は翻訳論が、これまで紹介してきた通り、政治・歴史的方向づけをいかに強く持つべきかに注目し、また、いかに翻訳論が翻訳社会学的問題とならざるをえないか、に驚かないであろうか。

この会議はこのような種々の研究ののちに、13の決議⑬を行った。(1)F I Tとユネスコに翻訳賞を設けるよう勧告する。とくに余り知られてない国の文学に翻訳賞を設けよ。(2)著述家はその著書が訳された場合、外国から得た報酬の50%を訳者に与えよ。(3)大学のゼミや卒論で翻訳作品と翻訳論を扱え。(4)原典の固有名詞や地名について原典の国のスペルをそのまま使うようにとの勧告を広く行う。(5)翻訳者に奨学金を与え、関係国との接触を密にさせる件。(6)外国作品の演出にあたり演出家と訳者が話しあうべきことについて。(7)新聞による翻訳の試みを勧める(後述)。(8)訳者名を著者名の下に書け。(9)ジェイムス・ジョイスなどの対訳(二カ国語)版の出版。(10)翻訳の大学やゼミを設けよ。(11)翻訳のための独々辞典を研究所が作成すべき件。(12)大きな語源辞典の必要性。(13)現代語と現代作家用語辞典の必要性。さらに特別の決議がアジア、アフリカ、南米などの一幕ドラマ翻訳コンクールを行う件についてまとめられている。ところでこの決議の(7)は、新聞社の協力をえて行われた開催前の翻訳コンクール(Übersetzer-Wettbewerb)をさすものである。Graham Greene のショートストーリーのごく短いものを独訳させて送らせる。参加者は名

を秘して回答する。職業は主婦、学生など自由である。これに対して西ヨーロッパの他トルコ、ガーナ、アメリカなどから1120通の応募があり、専門委員がこれを検討、まず620通を厳選した。この一篇の話を委員が620回、いな、さらにくりかえして読み、ミュンヘンの主婦 Susanna Branner-Hademacher が一等賞を得た。Italiaander は彼女を紹介し、すぐれた技能者で学術的才能の持主、多くの翻訳の経験者、完璧なドイツ語を操る人、不可能を可能ならしめる才人である、とのべている。しかしこのコンクールが注目されるのは、以下の Dieter E. Zimmer による研究成果要約⑬があるからなのである。

彼はこんなに短い、やさしいものを、大冊におけるよりもずっと注意して訳しているのに、なんと不手際が多く生ずることかといっている。このまま印刷に、と思うものは一つもなかった。われわれの翻訳とはこんなものか、と心配になってくる。誤りのない翻訳などは存在しないのだ。そんなものがありうると思う人は始めから誤っている。よき訳者はよく使う単語でも辞書に相談し、自己の思いつきや理解をたえず疑い、一度解決しえたものでも一時的なものだと知っているのである。そこで Zimmer はこれらの回答の研究を行い、あらゆる人のためになる、ちょっとした悪しき翻訳の典型をとり出した (Typische Untugenden der Übersetzer)。その項目は全部で15である。以下にごく簡単にそれを並べてみよう。原典では詳細な例があげられているが、ここでは省略する。

- (1) Besserwisserei: 原文にある語や文に、ものしりたげに自己製造的なものをつけ加える。
(Rache を eines Mannes Rache とし、Tier を Schlange としたりする。)
- (2) Zensur: 原典をモラルの面から検討し、モラル上の表現の不足を補う。「モラルはどうでもよかった」を「その当時私にモラルは云々」とつけたす。
- (3) Flüchtigkeit: 単語、文などの一つを訳していない。あるいは visa と vivat の、Pazifik と Atlantik の、そのほか数字などの読みちがえ。
- (4) Ignorierung des Zusammenhangs: 辞引にたよりすぎ、文を追うて考えつつ何度も読むことを怠り、関連を失する。
- (5) Faule Enphase: to read a book を ein Buch lesen と訳さず、感嘆符をつけたり、sehr という語を入れたりして冷静さを失う。
- (6) Satzhacke: 複合文を短かくきざみ、レガートをスタッカートにしてしまう。
- (7) Teutonisierung: 重々しいドイツ調の複合名詞に訳してしまう (Gefolgschaftstreue と loyalty)
- (8) Sprachklischees: 三文小説に出る言葉のステレオタイプをすぐ用いる (Rache という単語があると、in mir schwelte die Glut der Rache というように訳す。)
- (9) Mangelnde Sprachphantasie: 辞書を引いて辞書の中にうずもれ、その向うへ行けない。辞書にない時のヴァリエーションやニュアンスの発見がきかない。
- (10) Direkte Rede: 対話の訳はむつかしい。その調子をつかめず、木に竹をつぎ、カリカチュア的な対話訳となってしまう。

- (11) Schiefe Bilder: 比喻を形象的に可視的に効果的に訳す能力が欠けている時。
- (12) Importschwierigkeiten: ドイツにないものを知らないために訳しそこねる（英国の学寮での最年長者 the head of the house を Mentor, Klassensprecher, Familienoberhaupt, Haushaltsvorstand, Eigentümer des Hauses, Direktor などと訳している。）
- (13) Oktroyierung von Sprachmarotten: 外国作家に自分のおはこやきまぐれをおしつける。
- (14) Verschleifungen: 原作の突起部、特性部などをなくしてまるめこみ、なだらかな文にすることへの誘惑に敗れる。反復部を捨てたり、類語重畳を無視したりして、むつかしさをのがれる。
- (15) Kenntnismangel: 調査と研究の努力を惜しんでいる。

Zimmer はこのような悪い翻訳類型について、それぞれのよくない理由を説いているのであるが、ここで注目したいことは、不十分でもこのような方法によって、翻訳の技法が科学されつつあるということである。ここではこれまで余りにも観念的に、また巨匠の腕としてのべたてられた技法が、誰にでも学習しうるテキストに近づいている。しかもこれは1000以上の同一物の翻訳作品から、集団の手をへて社会学的な方法としての類型を用いて導き出されてきたものであった。

この学会はそのほか翻訳心理、翻訳権、古典翻訳の問題、ドラマの翻訳論、映画の翻訳、スラングの翻訳などなどを扱っているが、この学会の件はこれぐらいにして、1966年にモスクーで行われたシンポジウムに少しふれておく。この件については「ソヴェート文学」1967年1月号に中島とみ子の訳による紹介^④がある。それによると5日間約2000人が参加、70人の発言があった。東独、米、仏、伊などで16カ国の学者も参加した。ソ連の最近五カ年の出版物の三分の一が翻訳である（文学の場合。）精神交流のダイナミックな向上は、翻訳理論への関心を高め、才能ある訳者の大群養成が急務となった。ソ連国内でも65カ国語の文学が行われているのである。1918年以来ソ連では翻訳論が多く試みられ、この10年のあいだに46の修士論文、3つの博士論文がそれを扱った。国内の多くの大学では翻訳の理論と歴史が講じられ、研究所でも研究がさかんである。このようなアレクセイ・スルコフの所説は、そのままハンプルクの学会の決議と一つであるといえよう。またウラジミール・ショルは、今や翻訳論は文体論を通して言語学と接触する文学研究学の一つとなったという。またヨシフ・ブラギンスキイは「科学としての翻訳理論」、「翻訳技術についての科学」を主張する。また東独のハロルド・ラープは、これ以上は原作から遠ざかれないという、許容度の正確さの類型学を、比較文体論の助けで研究すべきだという。このような東欧での動向もまたハンプルク学会における姿勢と共通するところがあるといえよう。これに対してキヴィ・ガチエチラーゼは高尚化し、幻想を増加させるロマンチズム的翻訳者、機械的で形式破壊的で生気を失わせるナチュラリズム的翻訳者、勝手に主観でひずめるモダニズム的翻訳者などを批判し、翻訳技術におけるリアリズムを主張しているが、これは当然の主張であって、困難はここからさきのことであろう。翻訳がこのようにして、東欧、西欧で科学として、また学会的集団として、さらに大規模な国際性において追究されていること、また翻訳があたかも翻訳社会学、翻訳政治学ともいふべき広い観点に支えられていることに私達は大いに注目しなくてはならない。そして私達日本の外国語・外国文学研究者は、明治以来の翻訳について、このような

広さから、特に厳しく反省すべき問題をなおそのままにしておいてさきに進めるであろうか。ゲルマニストの場合、大戦中にどんなに多くの有能な学者がファシズム関係の本を大急ぎで訳したことであろうか。このようなモラルについてすらわれわれは未清算なのである。

レオ・ワイスゲルバーは、「文化構成における母国語」⑤の最後の章において、ドイツ語を母国語として研究するか、あるいは学問的に既存の一言語として研究するかによって根本的な違いがあるといっている。立派な翻訳者というものは、何よりもその対象言語をその担い手との相互作用と関連において、その担い手の生活における偽き（ライストウング）の視野において、すなわち言語と言語共同体のつながりと全体においてとらえるものでなくてはなるまい。ワイスゲルバーのいうように、ドイツ語はドイツ人の文化生活の造形力である。ドイツ語ができることは、このような造形力を、共時的に、通時的に、また言語、文学、文化、政治、経済などにわたってしっかりとらえることである。しかしながら私達は、外国語としてドイツ語を学ぶ。ワイスゲルバー流にこれをいいかえるなら、言語研究の対象としての外国語は、その担い手たる日本人への偽きの点で意義あるところをとらえ、その相互作用と関連をとらえなくてはならない。すなわち、外国語たるドイツ語と日本語共同体のつながりと全体を見極めることになるのである。ドイツ語翻訳者の問題は従って、ドイツ語教授者・研究者の場合と同じく、次の点にあらう。(1)ドイツ語とドイツ人との関係においてその相互作用と関連の機能と全体を、いいかえればドイツ文化の造形力としてのドイツ語をいかによく理解しているか。(2)ドイツ語を日本人との関係において、その相互作用と関連を日本人の文化生活の造形力として、いかによく理解しているか。そしてこの二つの課題は翻訳者において一致するのである。どんなに二つの国の運命がちがっていても、両者間の根底によこたわる批判的精神によって立派な翻訳の仕事ができるはずである。しかるにドイツ語と日本語の100年の関係史において、多くの誤ちがくり返されてきたのは、やはり翻訳の理論が未発達であって、翻訳者がただ生活のため、あるいはただ業績のため、倫理や政治や歴史から外れた行為を無批判に犯したことを物語っている。今日の出版においても、同じくさらに憂うべき訳業がくり返され、またそのためもあって翻訳者の地位は異常に低く不安定だといえるであろう。その点で世界の翻訳学の動向にわれわれは大いに学びつつ、以下の三つの点をほりさげてみなくてはならない。

1. 翻訳理論と翻訳業の歴史を百年にわたって再検討し、それを細部の技法や抽象的議論から一度解き放ち、社会・歴史関係のもとに考察しなおすことがまず大切である。明治以後の日本の翻訳理論は繊細で鋭い見方をそなえ、各方面について考察してきた。翻訳の可能性をめぐって、河盛好蔵⑨は原作と翻訳者のレベルの同等ないしそれ以上の関係を要求、大山定一⑩は原則として原作さえ立派ならその正直な翻訳は一応通用するとのべ、しかもそれだけに終らない生きた血で対象から学んでいくような翻訳を高く評価した。またモウルトン⑪の「翻訳は当為」であり、よき翻訳によって何物も失わずという積極説も紹介された。しかしながら激動する歴史の中でのさまざまな翻訳理論が、原作のレベルより高い・低いとか、生きた血でとか、よい翻訳だとかいうような、抽象的で無方向な観念性で論じられたに止まったことは、注目すべき特色だといえよう。

対象についても、成功するものとして、もともとその国土にあるものに似たものとその国土では目新しい全く新奇なもの（佐藤春夫^⑨）とか、その時折の文壇の教材という意味で、時代の必要に応じて訳した（河盛好蔵：鷗外の翻訳にかんし^⑩）とかいう選び方が範とされて、文学作品の社会に働きかける意義が全く見失われた議論に終わっている。翻訳方法論は大山定一のゲーテの翻訳論紹介のほか、野上豊一郎^⑪の適合的・受容的の二方法、森田草平^⑫の理想的・実証主義的の二方法、伊藤整^⑬や相良守峰ほか幾人もの直訳的・意識的、口語的・文語的などかなり興味深いところへと発達したのであるが、これらの議論もまた不思議にも内容からきりはなされたところがあるといえよう。例えば野上豊一郎のいう、均等な表現を日本語の中に探し求めるか、新しく作り出すか（すなわち適合的か受容的か）は、明治以後の文化史の中で考察し直されるべき問題を含んでいたのであって、支配者階級の国語政策、ひいては日本軍国主義と間接的に無縁ではなかったといえるだろう。このことは外来語排斥運動をとりあげても実証できる。技法的な細部の問題については、それらを総合して学として発展させるべきであった。例えば森田草平の翻訳方法論は、ひどく簡潔にはあるが、技法的細部についての鋭い考察を列記している。ハンブルクの国際翻訳学会での Zimmer の類型のようなものが、ここにすでにとり出されている。また沢村寅二郎^⑭の翻訳論は意味論的な方法を導入、思想の流れる方向と個々の語句の意義の中心点の重なり方を研究し、貫流する方向から外れた訳語を警戒した。また野上豊一郎が動機という言葉で展開した論議も一段と生彩ある有効手段であった：「もとより字句のおもてに忠実であるだけではいけない。その字句を産み出した隠れた精神を捉えねばならぬ。表現の動機とそれと呼んでもよい。翻訳者はそこまで感知を透徹せしめて、原作者の心境に立ち、原作者と同じ表現の動機を仿かせて、自分自身の言葉で原作と均等のものを作り出さねばならぬ。」野上豊一郎は動機的なものとして、心理的・感情的契機をとり出し、例を示して「要するに」ではなく「要しないで」どこまでも原作の一字一句の心持まで失わぬようにすべきことを説いた。また彼は空間的・形象的契機をとり出し、隠喩をどこまでも尊重すべき実例を手にとるように示し、原作の洒落までうつすべきことを説いた。同様に彼は律動的契機をもし無視すれば表現の死であることを強調、詩は訳される時少くとも詩的なものでなくてはならぬと説いたのである。そのほか原辞書を活用すべきこと（河盛）、語いを求めるたえまない訓練（リルケのグリム辞典研究についての話）、真に作品を読まずして大づかみな訳語を作品につけた例（大山定一の敦常良の文学史批判）、森鷗外と誤訳についての有益な教訓（鷗外がいかに苦心して訳し、また卒直に誤訳を認めたか）、あるいはマルチン・ルターの聖書翻訳の苦心談など、われわれは多くの有益な翻訳論が日本でくり返されてきたのを知るのである。けれども一番大きな問題は、西洋風文体（岸田国土の主張）と旧式文体（上田敏の訳詩）というように、翻訳文学論が無思想的に選択任意な効果や技法として扱われていることと、純然たる技法の問題が翻訳の実践論として蓄積され体係づけられるに至らなかったことの二つにあるといえよう。文学の内容と形式が理論家の頭の中で切り離され、翻訳は形式の問題として考えられてしまったのである。しかし同じ形式といっても、内容、ひいては社会と切り離せぬ局面と、純粹に技法的に切り離せる局面とがある。それを一つにして形式

主義におち入ったのは、明治以後の西洋文学輸入の流れが内包していた大きな弱点であった。その点で吉武好孝^⑤の著述は近代日本文学に与えた翻訳の影響を戦後かなり広い視点から歴史的に清算しようとしたものとして注目されてよい。この観点からすれば島田謹二^⑥の著述は美的な立場に限りすぎている。しかし島田謹二^⑥が、明治以後の新しい文学がかかげた希望として、(1)西洋最高の文学にたどりつきたい、(2)西洋最新の文学に追いつきたい、(3)西洋で一番うれる文学にあやかりたい、という三つを原理的に摘出、それがもつ皮想さと盲信を批判した点は注目される。吉武好孝は明治10年ごろまでの旧文化破壊工作の中で和文脈・漢文脈・欧文脈の混乱を重視、福沢諭吉、加藤弘之、西周らの啓蒙家が和田建樹、落合直文の雅文体と詰抗した事実の中へ翻訳の歴史を置くことから出発する。憲法発布・民権拡張の目標と明治初年の訳業（スコット、モア、スウィフト、デフォー）とは一つの切り離せない関係があった。この出発点から次の10年の口語文体・言文一致運動への流れを見失わず、その中へやがて二葉亭四迷と森鷗外、リアリズムとイデアリズム、英国思想とドイツ思想の対立モチーフを探し出して研究していこうとするのが吉武の著述である。ドイツ文学がどんどん優位を占めていったことが、日清・日露戦争と並行していること、とくにドイツ文学の中で生田長江や高山樗牛や登張竹風のニーチェ訳が世に迎えられたこと、それらを大正・昭和にわたってかみしめていかぬ限り、やがて一流ゲルマニストがこぞって大戦を讃え、無数のナチス文化を争って訳した事情は理解しえないであろう。丸山国雄^⑦はこう書いている：「わが国はドイツをして支那における根拠地を放棄せしめたのである……。しかし敵意は極めて微々たるものであった。わが国民もまたドイツが欧州大戦において善戦し、その奮闘力の偉大なることに驚嘆し、むしろドイツを尊敬したのであった。即ち彼の戦闘力は武器の優秀なることはもちろんであるが、その戦闘に対する精神力がわが武士道精神に近似し、両国民間に精神的共通点があることを発見した。」今や木村謹治はゲーテの理想国を宗教と国家への絶対無我の帰属関係だと限定、日本の国家体制とゲーテの確信とは一つだとした。新関良三はナチスドイツ劇をデイオニゾス劇の再生だと思いこむ。高橋義孝は古きゲルマン魂が不死鳥として立ち上った、とナチス文学を讃美し、高橋健二はヒットラーの闘いに感涙して血によって国境を変えることは正義にそむかず、とのべた。鼓常良、秋山六郎兵衛、吹田順助などの文学史・思想史はナチスにすっかりからめとられ、ハイネやT・マンをののしっている。上村清延、吹田順助、高橋義孝、真鍋良一、石川鍊次などはA・ローゼンベルク、ヒットラー、チェンバレンなどの中心的なナチス書を訳し、ナチス文学の訳者に至っては限りないリストが作成されねばならなくなる。私たちはこのようなアナクロニズムをだまって通りすぎてよいだろうか。そしてこの現象と翻訳理論とは無縁であろうか。翻訳論はまず明治以後100年の理論と実践の歴史を社会と歴史との緊張関係の中においてしっかりと検討し直すことから始めるべきである。

2.次に今日の高度に発達した工業社会の中で翻訳が占める社会的位置と課題を、社会学的経験に力を借りて省察しなくてはならない。文化に直接関係のなさそうな産業界における翻訳は、今や交通に貿易に工業に、緊急な問題となり、多くの翻訳会社生まれつつある。ここでは翻訳や通訳が実用的に要求されて、速く、明快に、正確に、具体的に訳されることが求められている。言

業にはこうした諒解手段的なものと文化の趣味領域的なものと二つの位相があって、二つの重層関係が並行しているらしい。この二つの言語はあくまで違ったものであろうか。それらはどういう部分を共有し、どういう部分でちがっているものであろうか。今日この二つの言語は相容れないものようであるが、それは人間の未来にとってよいことであらうか。前者は産学協同的で全く商業化していくが、後者はどうなっているであらうか。今日の言語教育はこのような問題についてどういう確信をもつべきなのであろうか。聞き、話し、読み、書く言語学習においてはそう開いていない矛盾をわれわれは人為的にどちらかの方向へもっていこうとしているようにも見える。もっと柔軟にこの二つの言語は一つの根から出ている枝として体系化されてよいのではなかろうか。ゴート語聖書の訳者ウルフィラス（西暦318?—381）から、ノートカー・ラベオ（950—1022）をへてルターに至るまで、ドイツ文化史における翻訳をみても、宗教的翻訳史は文化と実践の深いつながりを示している。このようなつながりを、今日の人間もなんらかの理論でつなぎとめなくてはならない。近代文学における翻訳史は余りにも社会から遊離して内面と美に逃避しすぎて、ジャーナリズムやマスコミや工業社会や大衆とのしっかりした結合や対決をおこたったのではなかろうか。しかも今や出版は翻訳権中介業者の争いと化し、良心的出版に手を出す零細出版社はたおれ、ケネディ大統領の死やスターリン殲の告白を書く本のために8万ドルをアメリカエイゼントに支払うという状況である。出版はたんに資本主義的商品を生むのではなく、思想文化の方面で批判的で建設的な大きな役割りを果たすことに本質があるにかかわらず、常に利潤追求の具となり、その寡占化は思想統制につながっていく。新安保条約直後からの大出版社のアメリカへの傾斜は、出版界が出版本来の姿を見失っていることをよく物語っている²⁸。こうなってくると今日の工業社会において、工業的翻訳と文化的翻訳の社会的性格はそうちがったものになってくる。いずれもいわゆる文化産業なのであって、ただ工業的翻訳の方が正直であるにすぎないといえる。だから戦後の翻訳と戦前のそれとをくらべ、戦前・戦中は事大主義だったが今日は民主的になったとはとうていいえそうもなくなってくるだろう。世界の有数な翻訳王国日本におけるバベルの塔のような混乱は、結局一つになって体制が歌う明治百年に唱和しているといわれかねない。しかし工業翻訳と文化翻訳の二つの言語がこうして文化産業として接近している否定的側面をとり出しう一方、われわれはさらに国際的言語としてのおそらく積極的な側面を両言語間に認めることも可能ではなかろうか。工業社会の中での実践的翻訳には、国際会議、国際学会、平和運動などにみられるように、視点を転ずれば文学作品の翻訳に劣らず文化的に重要な仕事が増大している。文化産業にのかった翻訳よりはこちらの方が余程積極的に文化に貢献しうるだろう。ギュンター・アンデルス²⁹は、日本の平和会議での訳詩にふれて、最大限に簡単に話すこと、一つ一つの意味のはっきりした、独立した文章を用いて話すこと、国際的な会議で世界中の言葉で話すように話すこと、会議の公用語に少なくとも翻訳できるように話すこと、地方的なカスなしに話すことを要求し、しかもそれを詩についても、文学についても主張しているのである。「母国語の意味の深さとか、文化程度の高い言語の豊かな内容など、こうした点に言語の理想像を求める人たちからみれば、わたしの主張は言語の貧困化を意味するように考えら

れるかもしれない。しかしよしんば貧困でも、遠くの人々にまで理解される言葉は……自分の世界にだけとじこもって目標を誤ってしまうような言葉よりもはるかに充実している……。それが国語の精神に矛盾するかどうか、それをきめるのはわれわれ自身の責任と努力である。むしろ今いった規律のゆえにこの言語がかえってわれわれの国語により影響を与える可能性すら考えられる。世界文学ではどんな外国語に翻訳されても迫力と真実性をいつまでも失わずにいるような、強烈な力をもった新しい言葉がたえず創造されてきている……今日のドイツの哲学者で翻訳できる言葉で語っているものは一人もいない。」こうしてみると工業社会の二つの言葉はそれほど徹底して対立するわけではない。文学はもっと社会に肉薄し、大衆のものとなるだろうし、実際の通訳や翻訳は機械技術か商業通信から始って国際会議や平和集会や東西イデオロギー論争をつつみつつ、文化と矛盾しない連続性をもつことができるであろう。そこで大きな問題は、翻訳者たちの社会的地位である。目下のところ工業翻訳は会社に、文化翻訳は出版者につながれて、結局双方とも国家の統制に操縦されやすい。そのために翻訳者の社会的地位は倫理的にも職業的にも実に低かったのだといえよう。翻訳で生活することは殆んど不能に近く、訳者たちは大学や会社で席をおいて余暇に翻訳にはげむ場合が常態だった。しかし今日大学人は研究に主力を置くことが好ましいし、業界は翻訳エージェントを通そうとしているし、このようにして翻訳が職業として独立し、翻訳者がそれ自体にうちこめる状況が生まれてきたと考えられる。翻訳者がこの時にあたり、自主性を守り抜く集団を形成し、原子力時代の平和産業に語学を役立て、また日本文化の発展にすぐれた外国文化を紹介することができるかどうかは、重要な日本文化の試金石である。ハンブルクにおける「国際文学翻訳学会」がもつ集団のさまざまな創意はその可能性を暗示している。われわれはヨーロッパよりも広範囲に、力をあわせて強力な翻訳者協会を設立すべきではなかろうか。

3.われわれはできるだけ広い立場に立って翻訳の理論を秩序づけ、それを不可分割な全体係にと発展させ、かつその根底に翻訳の存在理由を明示しなくてはならない。このことは多くの領域にたずさわる者の協力によってしか可能ではないが、まず第一に飾りなくて正確な、意味上原作と等価な翻訳に達するための実践的な基礎を、あらゆる翻訳に共通な基礎部分として考察すべきであって、特殊領域としての文学翻訳や商業通信翻訳に直行すべきではない。そのためには聞く・話す・読む・書くについての訓練や、品詞論とシンタックスと基礎単語の緊密な運用が大切なのであり、すでに言語学習が戦前とはちがった、急速に変わりつつある文法や訓練に基づいて行われていることに注意を向けるべきであろう。語学試験における独文和訳について、品詞論・文章論・単語からみた誤りのほかに、どのような個性的な誤りがあるかを経験によって類型化して、さしあたりその学習用テキストを作成するほかないだろうが、それにはハンブルクにおける翻訳コントロールが参考になりえよう。通訳についても試みるべき練習が考えられよう。またギュンター・アンデルスの先述の所説は、この第一段階からの出発を唱えているとうけとられてもよいだろう。しかしながら言語は、修辞学や文体論や韻律論とも無縁でありえず、文学外のものであっても、それらを基礎として強く含んでいるのである。それゆえ翻訳論の第二段の仕事は、かつて野

上豊一郎が動機となづけたようなものをどう訳すかにある。彼がとり出した、心理的、形象的、律動的という三動機は、翻訳が心理学や修辞学や韻律論と深いつながりがあることを端的に示している。ただしこのような見地を文学特有のものとしてよりは、文学がもつ普遍性として、エッセイや論文やジャーナリズムの文章をも包みこんで考え直すべきだと思われる。例えば新聞のもつ新しい小ジャンルやルポルタージュは重要である。またこのような動機のほかに、例えば身振りの動機を社会的なものとして加えてみてもよい。ブレヒトの肝っ玉おっ母とその子供たちがオランダ語で上演された時、その訳者が演出に立ちあったが、「身振りで表現するのが困難な時たいていその原因は翻訳にあって、われわれはそれを修正した。ブレヒトの言語にある表情的要素をもっとよく翻訳で出すには翻訳者がモデルブーフを目の前に置いて、稽古に立ちあうことである……。劇場でできあがった翻訳こそ最上のものである。多くの作家にとって書かれたものと語られたもののあいだに差異がある。ブレヒトにあっては書かれたものがすでに語られたものを包含している。」ルート・ベルラウのこの報告は余りにも翻訳論が美にかたよることを戒める興味ある忠告である。マルクスやエンゲルスが比喻の社会性をいかに生かし、また修辞の反動性をいかにはぎとったかは、一つの研究課題である。またわれわれはE・R・クルチウスがおこなったトポイ研究をも翻訳理論にくみいれなくてはならない。古代・中世・近世と貫通している表現の場を究める困難な作業は殆んどその方面の研究者にしかできないことであり、さしあたり西洋にかんしておこなわれたのみあるが、それでもその一端はまとめられて理論化され、また日本と東洋のトポイにもひろげられて、翻訳のもつもっともむつかしい局面を意識させなくてはならない。翻訳のもつこのような心理学、修辞学、韻律学、社会学、文化史などの諸側面が、どのていどまで諸方面の表現に普遍的で、どのていどまで特殊のかを考えるには、集団の作業が必要となってくる。第三段目の問題は翻訳者が何らかの文化内容にしっかりとくんで、その方面を中心に翻訳すべきこと、いわば翻訳と文化の密接な関係についての理論をもつことである。グロータースは「文化的な余分」という言い方でこの問題を重視した。たしかにそれがいないために文化的諸背景が予測できないのでは、言語についていくら能力があっても、真の意味をみつけて翻訳することはできない。「訳者にとって必要なのは言語外の知識である。」とグロータースはのべ、いろいろの誤訳例でそれを強調した。翻訳は一種の説明だともいえるほど訳文における余分なものがわかってこなくてはならない。キリスト教文化に全く無縁な者が、司祭、牧師、神父、僧などのどの訳語をとるべきかと迷い誤るような例は数知れない。もちろん文化はすべてみなつながって互いに無縁ではないから、専門化して限ってしまう姿勢も誤っている。できるだけ柔軟に巾広く理解する人こそ翻訳者として適した存在だといえるかもしれない。誤ったプラグマチストがあって、修辞や文体のことからそっぽを向く例があるが、そのような姿勢では文化の一領域の翻訳者にもなれないであろう。以上のべてきた三つの領域を翻訳論として考察しなおして、あらためて翻訳とは何かとその存在理由を問わなくてはならない。翻訳の課題についてワルター・ベンヤミンは^⑧、母国語の成長と変遷の中へ、新しい国語の中へ入っていくことであるといった。二つの死語の間の等価性でなく、生きた外国語を自国語の生命の中へと時をかけて成熟させてい

くことが翻訳の課題である。だからわれわれは外国語と外国文化を自国語と自国文化へ反映させるというような感覚を棄てなくてはならない。二国語間の関係から反映論的性格を一掃し、外国語の内的諸関係をつかみ、萌芽として強くたくましく自国語へと実現していくのであり、原作の全体を映すのでなく原作の反響がその中からこだまするような翻訳を行うのだとベンヤミンはいう。訳者は哲人と同じくミューズを知らず、芸術と教養の中間に立っている。彼は自国語で伝達不能なものを自国語の垣根を押し上げて自国語へと解放する。彼の教義は *die Treue in der Freiheit der Sprachbewegung*— 言語運動の自由の中における原作への忠実ということである。そしてこのような原作への忠実と自国語での自由による翻訳の課題の実現は、外国文化への忠実と日本文化での自由という外国研究の課題の実現と一つになって、翻訳のアウトノミーとアンガー・ジュマンの統一を形づくることであろう。

参 考 文 献

- ① Rolf Italiaander: Eröffnungsrede
- ② Zlatko Gorjan: Schriftsteller, Übersetzer und Verleger
- ③ Rolf Italiaander: Entwicklungsländer und Übersetzer
- ④ August Klingenberg: Die afrikanischen Sprachen und die Schwierigkeiten ihrer Übersetzung
- ⑤ Annemarie Schimmel: Übersetzungen orientalischer Poesie
- ⑥ Gerhart Pohl: Eröffnungsrede
- ⑦ György Rado: Zur Psychologie des literarischen Übersetzers
- ⑧ Marcel Reich-Ranicki: Verräter, Brückenbauer, Waisenkinder
- ⑨ Bedrich Bösser: Die Übersetzer und ihre Kritiker
- ⑩ Kurt Heinrich Hansen: Fünf Vorschläge
- ⑪ Hans Piper: Gedanken eines Verlegers
- ⑫ Die Resolution
- ⑬ Dieter E. Zimmer: Der Wettbewerb der Übersetzer
- ⑭ 文学翻訳理論の緊急な諸問題, 中島とみ子訳, ソヴィエト文学, 1967.1.
- ⑮ Leo Weisgerber: Die Muttersprache im Aufbau unserer Kultur Düsseldorf 1957
- ⑯ 河盛好蔵: 翻訳文学の諸問題, 昭29, 岩波書店
河盛好蔵: 新文学論
- ⑰ 大山定一: 文学ノート, 昭22, 秋田屋
大山・吉川: 洛中書簡, 昭21, 秋田屋
- ⑱ モウルトン・本多顯章訳: 世界文学 (P.G.Moulton: World Literatur) 昭27, 岩波書店
- ⑲ 佐藤春夫: 近代日本文学の展望, 昭25, 講談社
- ⑳ 森鷗外: 訳本ファウストについて, 不苦心談
- ㉑ 野上豊一郎: 翻訳論, 昭13, 岩波書店

- ㉒ 森田草平：翻訳の理論と実際，昭8
 - ㉓ 伊藤整：翻訳の研究，昭8
 - ㉔ 沢村寅二郎：翻訳論，昭9
- } 英語英文学刊行会
- ㉕ 吉武好孝：翻訳文学発達史，昭18，三省堂
 - ㉖ 島田謹二：翻訳文学，昭26，至文堂
 - ㉗ 丸山国男：日独交渉史話，昭16，ラジオ新書60，日本放送出版協会
 - ㉘ 宮田昇：翻訳権の変遷，昭42，みすず98～100
 - ㉙ ギュンター・アンデルス，篠原正瑛訳：橋の上からの眺め，昭35，朝日新聞社
 - ㉚ ルート・ベルラウ：オランダの肝っ玉（ベルリナーアンサンブル・モデルブック，俳優座）
 - ㉛ E.R.Curtius: Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter 1948, Bern
 - ㉜ W・A・グロータース，柴田武訳：誤訳—翻訳文化論，昭42，三省堂
 - ㉝ Walter Benjamin: Die Aufgabe des Übersetzers 1925 (Schriften I, SuhrkampVerlag)